子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2011年5月　NO.161

[もくじ]

2～3　スポーツが変われば楽しさの輪も広がります…永吉宏英

4～6　演劇大学inこうちという熱風…篠﨑光正

7　言葉の現場から27「羅生門」の謎を読み解く…広井護

8～9　ほにやよさこいカタール見聞録…泉真弓

10～11　刑務所のこと御存知ですか…佐伯紀男

12～13　第21回高知出版学術賞を審査して…中内光昭

14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン:「季節の味わい」畠中加奈子

(財)高知市文化振興事業団

スポーツが変われば楽しさの輪も広がります

永吉　宏英

〝競争と祭りが一緒に駈けてくる東京マラソンカラフルにして〟、この短歌は、私の大学の同僚が綴ったものです。祭りのようにスポーツを楽しんでいる光景が目に浮かびます。東京マラソンは応募者が年々増えて、二〇一〇年には三十一万人を突破しました。参加定員は三万五千人、お祭りには恒例のかぶりものやカラフルな衣装に身を包んだおおぜいの市民ランナーが、東京の中心街を駆け抜けます。コースには市民によるプライベイトエイドのテーブルが並び、二百万人を超える応援の人たちが走路を囲んで、東京マラソンはほんとうに「競争と祭りが一緒に駈けてくる」マラソンになりました。

東京マラソンの特色は、何よりもチャンピオンを争うマラソンに必ず設けられるコース途中の制限タイムがなく、ゴールまで七時間待ってくれることです。ジョギングの延長でだって完走できます。ちなみに、これを北海道マラソンと比べるとその違いは明白で、北海道マラソンではスタートから四十kmまで五kmごとに関門が設けられ、制限タイムを超えると走ることを打ち切られます。一般競技者のスペシャルドリンクは受け付けられませんし、少しでも広告的なものをユニホームにつけることも認められません。居酒屋の常連客が店名を染め抜いた法被を着てグループで走ることなどもってのほかです。エリートランナーがタイムを競うチャンピオンスポーツではそれは当然のことです。もちろん、東京マラソンもエリートランナーが順位を競うマラソンの一面をもっていますから、世界陸上の代表を争うような選手は、厳しいルールのもとで競わねばなりません。でも、その他おおぜいの市民ランナーは、おおめに見てもらえます。順位やタイムを競うこと以外に、完走することやカラフルに装うことを含めて、市民ランナーが自分を表現できる機会がたくさんあります。沿道で応援する人たちだって自己表現しています。プライベイトエイドで地元名物のお菓子を並べたり、そろいのウエアを着てアピールしています。つまり東京マラソンは、エリートスポーツと市民スポーツが地域を巻き込んで同じ舞台で共存する特別なマラソンで、それを可能にしているのが参加者に合わせてルールや大会運営を設定する発想の柔軟さです。

ルールを参加者に合わす発想、競争と祭りが共存するような大会運営の発想が、マラソンだけでなく野球やサッカーをはじめとする競技的スポーツへの中高年の積極的参加を後押ししています。還暦野球や古希野球のリーグ戦が各地で行われ、全国大会も開催されています。ちなみに還暦野球のルールでは六十歳以上の投手は十六・三mから投球することができ、投球イニングスも三イニングス限定です。だから古希になっても野球ができるんです。同様にシニアサッカーも各地で行われ、シニアのサッカー人口は六年間で三倍になりました。四万十川のウルトラマラソンは有名ですが、ウルトラマラソン（四十二・一九五kmを超えるマラソン大会）は、全国で一年間に五十大会を超え、その参加者のほとんどが女性と中高年です。最近ではタイムでなく一定時間内にチームで走った距離を競う駅伝が大はやり。一人が走る距離をチームで臨機応変に決められる自由さが受けて、老弱男女、いろんなつながりでチームが作られ、

待機場はお祭り状態です。

ところで写真は、もう二十年ほど前になりますが、私の故郷四万十川で実施した「シニアキャンプ イン 四万十」の七十三歳の参加者の勇姿です。かっこいいでしょう。三十人を超える参加者が、一人の落伍者もなく西土佐村から昼食や休憩を含めて五時間ほどかけて四万十川を下りました。ほとんど全員、初めてのカヤックでした。清流四万十川とカヌーがシニア世代を魅了したのです。当時は山歩きやハイキングが中高年の自然活動の定番になっていて、リバーカヤックなどとんでもないと考えられていました。でもオープンデッキであれば初めての人でも大丈夫。流れにゆだねられる川下りなら大きな体力を必要とせず、中高年にもってこいです。

このイベントは数年続きました。私達はこれまで、特定の高齢者像を勝手に作り上げて、高齢者の健康づくり・スポーツと言えば健康体操とニュースポーツというふうに、それに見合ったプログラムばかりを押し付けていたのではないでしょうか。今のシニア世代は好奇心旺盛、新しい体験、新しい人間関係をつくることに物怖じせず、体力もあります。もし、私たちがルールや大会運営を参加者に近づける努力を惜しまなければ、競技的スポーツにだって、アウトドア活動にだって挑戦するエネルギーにあふれています。

高知を舞台に競争と祭りが一緒に駈けてくるようなスポーツのイベントや大会、また、豊かな自然が舞台となったアウトドアの活動など、それらがどんどん行われて、高知がシニアスポーツのメッカとなる日を夢見ています。

ながよし　ひろひで

一九四六年　高知市生まれ
追手前高等学校、高知大学から東京大学大学院教育学研究科博士課程を修了後、大阪体育大学でスポーツ政策論と野外教育を担当して、現在、大阪体育大学学長。現在の主な役職は、日本野外教育学会副会長、日本キャンプ協会副会長、日本介護予防指導者協会会長、健康大阪二一推進府民会議会長、大阪府生涯スポーツ協議会会長、堺市スポーツ振興審議会会長など。

演劇大学 in こうちという熱風

篠﨑　光正

心地よい疲労感と達成感を味わえた貴重な数日でした。見回せば、演劇大学のために高知を訪れた講師のみなさんも、また、高知の演劇大学参加者のみなさんも、最後まで生き生きとした表情で、この事業の成果を充分に物語っていました。

開講式で挨拶する筆者

演劇が芸術だけでなく、教育のツールとしても、また、社会とのつながりを強める市民のコミュニケーションツールとしても、大きく見直され始めている現在、改めて演劇大学事業の重要性を肌で感じ取ることができました。

高知を含む四国の演劇事情については、活性化に協力したいという演劇人も多く、今回を出発点としてこれからも活動を活発化させたいと思っています。

実は私のことで恐縮ですが、四国との出会いは、三十年ほど前に高校演劇大会の審査を頼まれたことでした。その時の審査で選抜した最優秀校が、四国大会で優勝し、さらに全国大会まで勝ち抜き、とうとう全国一に輝いたのです。まさに夢のような快進撃でした。それ以来、再び全国一の演劇を四国から出したいと言う熱心な高校演劇関係者から、審査だけではなく講習会などさまざまな形で呼ばれ、そのたびに四国の演劇界と関わってきました。

さて、演劇大学の企画を提案した当初は、これだけ多くの方が参加するとは夢にも思いませんでした。これは、高知市文化振興事業団や実行委員会のみなさんのご努力が実ったわけですが、どうやらそれだけでは

シアターゲームを教える高都幸男講師
（右から2人目・後方）

ないような感触を得ることができました。

そこで、今回の成果について、振り返り、今後を考えてみたいと思います。

まず、カリキュラムについてですが、ふじたあさやさんにお願いした講座に、最も多くの受講生が集まりました。日本語の台詞を中心にお願いしましたが、むしろふじたさんは「国語」と「日本語」を分類して、大変わかりやすく教えていただき、受講生の多くは、大変満足していました。「国語」としての概念や、歴史からはじまった講座は、基本の呼吸や発声、発音、そして講座の最後にはテキストの三遊亭円朝の「牡丹灯籠」の速記本を一人ずつ朗読するという、講義と実技の両面からの充実した講座で、若い人も朗読経験者も老若にとらわれず幅広い年齢層に充分に受け入れられるものでした。このような講座は、全国で聞きたいものだと痛感しました。

また、「劇場法」をお願いした大和滋講師（芸団協・芸能文化振興部部長兼調査研究部長）の講座には、いったいどのような人たちが集まるのか興味津々で教室を見ていましたが、若い受講生も出席していたので、この法律に対する関心が広がりつつあることを実感しました。

そのほか、流山児祥講師の講座では、最後にロビーで上演するなど、にぎやかな成果をあげる講座や、高都幸男講師の講座では、熱のこもった即興の演技なども繰り広げられました。

これらの講座を通じて考えると、全体から見れば、消化不良にもならず、第一回目として丁度良いカリキュラムだったと思います。もちろん、もっと色々な講座が必要なことは承知していますが、実行委員会の検討成果が出て、無駄のないスリムなカリキュラムに仕上がりました。

その中でも特筆すべきは、演出家の養成講座としての演出指導の時間に、予想をはるかに超えた見学者が集まったことです。これまでの演劇大学ではなかったことです。これは何故なのか。演劇創造作業に関心のある方が多かったということに尽きるかと思います。演出を担当した演出家が、普段は自分がダメ出しを受けることもない稽古場で、講師からダメ出しを受け、さらにその場で対応を考えて

熱く指導する流山児祥講師

演出していくという、演出家にとっては、大変厳しい環境の講座でしたが、見学者の熱意や担当の演出家の努力により、充実した授業となりました。特に見学者からの質問は、厳しいものもありましたが、演出担当者の誠意ある対応で、問題解決に役立つ時間となりました。また、見学者の中には、経験豊富な方や、若い役者さんなどもいて、さまざまな方が発言しました。

最後の上演の時には、見違えるほど演出を練り上げ、観客から盛大な拍手を受けていました。

演劇大学の最終日には、多くの貴重な意見が寄せられました。今後の運営に役立て

日本語や朗読について指導するふじたあさや講師

て行きたいと思っています。

このように、高知の演劇界には、各地で見られる演劇地盤沈下の現象はあまりなく、むしろ機会があれば演劇に関心を寄せる層が多数あることが分かりました。演劇大学の一般的な状況は、この高知の状況とは少し異なっていて、演劇大学がその土地の演劇人の交流に一役買うことが大変多いということです。高知でももちろんそれらの交流の成果は上がっていましたが、他の土地では、平たく言えば、我々が間に入るとみなさんが仲良くなるというのが成果です。

さて、冗談はさておき、本題に戻りますが、今回、演劇大学成功のもうひとつの要因は、高知市文化振興事業団の活躍です。市民コミュニケーションツールとして認められ始めた演劇の価値を、いちはやく捉えて協力を惜しまなかった高知市文化振興事業団の在り方は、特筆すべき点ではないでしょうか。これまで演劇については、表現形式が過激になりやすいイメージがあるなど、行政一般の認識は旧態依然として、クラシック音楽などの扱いと演劇では大きく異なっていました。しかし、今回の時代をよく把握された見識の高い高知市文化振興事業団の対応は、他の文化財団へも今後影響を与えて行くことと思います。

終わりに「演劇大学 inこうち」で、生まれ、吹き始めた演劇の熱い風が、これからも唸りをあげて、四国、全国を吹き荒れる事を期待しています。

子どもワークショップの大杉良講師

しのざき　みつまさ

一九四八年　東京都生まれ
「ブンナよ、木から下りてこい」（芸術祭優秀賞）で演出家として認められ、「ドラム一発！マッドマウス」（芸術祭大賞）、ミュージカル「光の彼方に」（芸術祭優秀賞）等、他にも数多くの賞を受賞。演劇研究にも手を広げ、短期演技養成法「篠崎光正演技術」を考案。シノザキシステムで養成した俳優は、竹中直人・野田秀樹等三千人を数え、日本の俳優エキスパートとして活躍中。現在、演出家・電劇主宰・シノザキスタジオ代表・シノザキシステムキッズ代表・桐朋学園芸術短期大学非常勤講師・東京芸術大学非常勤講師・日本演出者協会理事を務める。

言葉の現場から 27

「羅生門」の謎を読み解く

広井　護

芥川龍之介の「羅生門」は、「永年、使われていた主人」から「四、五日前に暇を出された」下人が羅生門の楼上で突然盗人に変わるという衝撃的な物語である。冒頭が有名だ。

> ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。
> 広い門の下には、この男のほかにだれもいない。ただ、所々丹塗りのはげた、大きな円柱にきりぎりすが一匹止まっている。

初めて授業でこの作品を取り上げたとき、生徒の一人からこんな感想を聞いた。

「なんでかようわからんけど、この『きりぎりす』の描写がえい。小さな虫が一匹いるだけで、ものすごく物語らしい感じがする。」

実は私も同じ感想を持った。けれどなぜそうなのかということをうまく説明できなかった。このきりぎりすが、物語の巧妙な仕掛けであり重要な小道具だということに気がついたのはずいぶん後のことである。

以下は複数の研究書の分析を参考にして、私見を加えたものである。

きりぎりすは、第一に季節を表している。「羅生門」の季節は秋なのである。下人が行動を開始するとききりぎりすは再度登場する。

> …風は門の柱と柱の間を夕やみとともに遠慮無く吹き抜ける。丹塗りの柱に止まっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

「きりぎりす」が「もうどこかへ行ってしまった。」のは、下人が雨宿りを始めてから、かなりの時間が経過したからである。きりぎりすは「時の経過」を示す小道具でもある。

それだけではない。本来「きりぎりす」は「大きな丸柱に止まっている」虫ではない。草むらの中にいるのがふつうである。ということは丸柱の近くに草が生い茂っているということだ。しかも、あたりに人気がないから草むらを出てきたのだろう。

「所々丹塗りのはげた」という描写と考え合わせると、平安京の繁栄の象徴であるはずの羅生門が荒廃していることが読み取れる。きりぎりすは「場」を表す小道具でもある。

まだある。もしこのまま丸柱に止まり続けるならきりぎりすはどうなるだろう。飢え死にする他はない。これは、下人の運命を暗示している。

「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」とあるが、一体どこへ消えたのだろう。「夕やみ」の中へ消えたのである。

「羅生門」の最後は有名な以下の言葉で結ばれる。「外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、だれも知らない。」盗人となった下人は闇の中へ消える。きりぎりすと同じ闇の中へである。

さらに、「大きな丸柱」と「一匹の（小さな）きりぎりす」の対比は、「巨大な羅生門」と「一人の下人」の対比と重なる。「きりぎりす」も「下人」もちっぽけで孤独な存在だ。

そう考えると、きりぎりすは、この物語の主人公である下人を象徴する重要アイテムだということがわかる。

①時間設定
②場面設定
③人物設定

この三者において、きりぎりすは重要な役割を果たしている。きりぎりすの描写に強い印象を受けたという生徒の感想は正鵠を射たものと言えるだろう。

さて、下人の人物像は「きりぎりす」によって象徴されているのだが、そのあとさらに次の三種類の生き物によっても比喩される。

「（飢え死にすれば下人は）犬のように捨てられてしまうばかりである。」

「一人の男（下人）が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。」

「下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上り詰めた。」

「きりぎりす」→「犬」→「猫」→「やもり」と「喩え」が続く。この四つの生き物の中で「きりぎりす」だけが異質である。今時の言葉で言うと「草食系」だ。

「羅生門」は、「草食男子」の下人が、主人から暇を出され、（おそらく）就活に失敗し、追いつめられて「肉食男子＝盗人」に変貌する物語だ。そのプロセスにおいても、「きりぎりす」のはたす象徴的意味は大きい。名作の細部は侮れないのである。

ひろい　まもる

一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

ほにやよさこい カタール見聞録

泉　真弓

二〇一〇年もあと少しで終わるという十二月、はりまや町にある「ほにや本社」に、在カタール大使館より一本の電話が入りました。

「一月にカタールのドーハで開催されるサッカーアジア大会二〇一一に『ほにやよさこい』が、日本のお祭り代表として選ばれました。つきましては、一月にカタールまで踊りに来ていただけますか?」と…。にわかには理解しがたいほど、急な、そして遠い国での演舞依頼に戸惑いましたが、カタールは二〇二二年のワールドカップ開催も決定し、今回のアジアカップは大変力を入れて取り組んでいること、文化交流のため参加十六ヶ国の代表的な踊りを一団体ずつ招待し、特設イベント会場で踊るということ、そして、カタールは非常に治安が良いということや、一月でも昼間は二八℃を超える日もあること等々の情報を頂き慌ただしく準備を進め、何とか一回目の出発日、一月七日を迎えました。

関西空港から約十一時間。夜明けとともに着いたドーハ空港。アラブの人々は、男性は長い白シャツに、頭にスカーフを巻く「ソーブ」というスタイル、女性は全身ほぼ黒ずくめのロングドレスに、印象的な目だけ見えるような「アバヤ」という民族衣装を身にまとっています。空港利用者だけでなく、空港の係員も、老若男女、ほぼ全員がアラブの伝統的な民族衣装で仕事をしています。ローカルと呼ばれる、先祖代々この地に住んでいる人達は、ほぼ一〇〇%の着用率だと教えられ、自分たちの生まれ育った国の文化である民族衣装をほとんどの国民が着ていることに驚くと共に、それだけ自国に誇りを持っているということをうらやましくも思いました。空港の外に出ると、湾のむこうにはまるで蜃気楼のようにビルディングがゆらゆらしながら建ち並ぶ大都市で、このように民族衣装の着用率が高いのは、とても不思議な感覚でした。彼ら彼女らは、民族衣装を身にまとったまま、日本と同じように国民のほとんどが文明の機器〝携帯電話〟を持ち、富の象徴〝高級日本車〟に乗っている訳ですから、他のファッションを知らないということではなく、自ら望んで着ているのです。

日本は、機能優先ばかりを考えて、自国の伝統文化や民族衣装を遠ざけてきました。ここカタールでは、新しい文化を受け入れながらも、脈々と受け継がれる伝統文化を大切にしていく、そんな愛国心に満ちた素晴らしいパワーに圧倒されました。

今回は、サッカーアジアカップ参加の十六ヶ国から代表一団体ずつが勢ぞろいして、ドーハ市内のいたるところに設営されたステージで踊りを披露していました。

今大会で、サムライブルーの日本代表チームは試合ごとに調子を上げ、勝ち進み、私達はわずか二十五日間に計三回のカタール遠征となったのでした。一回目と二回目の遠征は、それぞれの会場での演舞の他、ドーハ日本人学校でのよさこい出前授業、そして大使館、観光局への表敬訪問を行い、地元の方々や在カタールの日本人の子供たちとの交流をし、また、踊り子さんも高知県の観光特使として気合い十分に高知県アピールをして参りました。踊る度に地元の人達からの熱い声援が増していき、町を歩いていても「日本がんばれ!」と声を掛けられることも多く、微力ながらも日本応援へのムードを盛り上げ、三回目となる決勝戦にもお招き頂くこととなりました。そして、その決勝戦では、小さな応援のうねりが一丸となって会場全体に溢れ出し、スタジアム全体がサムライブルーの日本代表チームを後押ししてくれたように感じました。

私たちの持ち時間は十五分。想像を超える歓声と拍手に踊り子さんは、戸惑いながらも最高のパフォーマンスを見せてくれました。曲は、歓声でほとんど聞こえない状態でしたが、踊り子さんは大きな会場でもひときわキラキラ輝いているように見えました。

ご存知のように「よさこい」は、戦後の復興のため高知のみんなを元気にしたい、笑顔にしたい!と『志』をもって始まったお祭りです。その『志』は、言葉が通じなくても伝わるのでしょう。踊り子さんからお客さんへ、お客さんから踊り子さんへと笑顔のキャッチボールがどんどん広がっていきました。土佐で生まれ、育くまれてきた「よさこい」は、今や日本各地へと広がり、その土地の個性を取り込んで成長をし、世界へと広がっています。他に例をみない進化する「よさこい」を生み、育てた土佐の個性を、私達はもっと誇りに思っていいのではないでしょうか…。遠くカタールの地での演舞は「よさこい」の可能性と、土佐人の素晴らしさも教えてくれたように思いました。

後で分かったことですが、決勝戦の直前に踊る時間も向きも変更されてしまいました。それは、本来は来られないはずだった皇太子様が、急に来られたことでスタッフも大混乱となり、十分な伝達もなく、とにかく「あちらに偉い方が来たのであちらに向きを変えて踊ってください!」と本番直前の方向転換。これもまた王様の国、アラブでは王様の為なら、急な変更は当たり前とのこと。その為、今回は、前代未聞の斜め向き隊列での演舞となりましたが、カタール遠征では国を越え、言語も宗教も越えて、笑顔が笑顔を呼びお客さんと一体となる「よさこい」の『志』を伝えることができたと思います。

見事、日本代表が優勝した次の日、スーク（市場）に行くと、お店の人、道ゆく人々から「おめでとう!」「日本は最高だ!」と声をかけられました。踊り子さんには、大変な強行軍でしたが、日本人の誇り、土佐人の誇りを感じさせて頂ける機会となり、素晴らしい体験をさせて頂きました。

日本は今、大きな災害に見舞われ、気持ちがうつむき気味になってしまいますが、こんな時だからこそ、「よさこい」の『志』を大切に高知から元気を発信していきたいと思います。

いずみ　まゆみ
高知市生まれ・ほにや代表
「ほにや」は日本の伝統文化に自由な遊び心を加えた土佐ブランド。
「ほにやよさこい」は一九九一年に立ち上げ高知を発信しています。

刑務所のこと御存知ですか

佐伯　紀男

私は、平成二年に法務省に入省以来、多くの期間を霞ヶ関で過ごしてまいりましたが、縁あって、二〇一〇年四月から一年間、高知刑務所長を勤めさせていただきました。

生まれも育ちも大阪で、高知は家族旅行で一度訪れたことがあるだけの未知の土地でありましたが、とても東京や大阪と同じものとは思えないような美しい海や空、清く澄んだ川、そして県全体が自然豊かなことに驚きました。交通はちょっと不便だけど、よそ者を排除しないおおらかな雰囲気とも相まって居心地よく、また、年に二度も旬を楽しめる鰹の美味さ、新鮮この上ない清水鯖など、海の幸にも恵まれて質的に豊かな生活が送れる土地柄であり、高知での勤務は忘れ難いものとなりました。あとは湯量豊富な掛け流しの温泉さえあれば、文句なしですが…。

さて、皆様は刑事施設（刑務所、拘置所を総称して「刑事施設」といいます）にどのようなイメージをお持ちでしょうか。「怖い」、「暗い」、「臭い飯」などなど、様々でしょうが、良いイメージを持っていただくことが難しい施設であろうと思いますし、多くの皆様にとっては、自分の生活とは関わりのないところで、問題なく運営されていれば、それ以上の関心はないといったことが正直なところではなかろうかと思います。

しかし、世間を震撼させるような象徴的な事件の発生などに起因する体感治安の悪化を背景に、安全安心に対する関心が高まっていることに加えて、平成二十一年五月、「裁判員制度」が始まり、刑事裁判のその後、受刑者はどのような場所で、どのような処遇を受けて、どのように社会に復帰していくのか、といったことにも無関心でいられなくなった、むしろ多くの皆様が積極的に関心を抱くようになり、再犯の防止に向けた具体的な結果が求められるようになったと実務家として実感しています。そこで、この機会に、少しでも多くの皆様に、刑事施設をより正しく理解していただければと思っております。

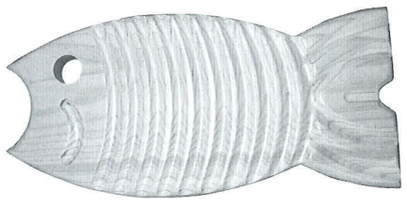
最初に、刑事司法の一翼を担っている刑事施設の最も重要な任務は、受刑者や未決拘禁者の収容を通じて、我が国の法秩序を維持し、安全安心な社会の実現を図ることです。

刑事施設では、受刑者の再犯を防止するために様々な処遇を行っていますが、施設内の規律が適正に維持されていることは、あらゆる処遇を行う上での前提となります。どんなに厳正に捜査や刑事裁判が行われても、確定した刑の執行が適切に行われず、刑務所がパラダイスと化していたり、刑務所内からマフィアのボスが、社会にいる配下に犯罪の指示をしているような状況があれば、厳正なはずの捜査や刑事裁判も無に帰すこととなり、法秩序を適正に保つことはできないのです。このため、刑事施設では、適正に規律を維持することを重視しています。

刑事施設の次なる任務は、受刑者を改善更生させることです。人が犯罪に至る原因は様々であり、再犯を防止するためには、その原因となった要因を可能な限り解決をすることが必要ですが、生育環境やこれまでの経験は変えることができませんので、将来に向かって変えることができる部分に着目する必要があります。刑事施設では、法令の定めるところにより、外部との交通（面会や手紙による交流など）について、受刑者の改善更生の援助が期待できる親族などの人々との関係維持を図る一方で、悪影響を及ぼしかねない者（典型例は暴力団関係者）との交流は遮断し、受刑者ごとに必要な環境を整えた上で、認知行動療法などに基づく改善指導（当所では、①薬物依存離脱指導、②暴力団離脱指導、③性犯罪再犯防止指導、④被害者の視点を取り入れた教育、⑤交通安全指導、⑥就労支援指導と、その他の一般改善指導を実施）や、生活指導を行っています。また、受刑者の中には、まじめに働いて得た収入によって生計を維持していくという当たり前の習慣が身に付いていない人もいますので、刑務作業の実施を通して、就労意欲の喚起や、技能の付与に努めています。

刑事施設では、このような取り組みを日々行っていますが、受刑者を善良な社会の一員として社会復帰をさせていくためには、本人自身が、何としてでもやり直そうという自覚と意欲を抱くことが最も重要であることは当然であり、刑事施設の取り組みも、その自覚と意欲を導き出すためのきっかけ作りを手伝っているといったことが、最も正しい捉え方だと思います。受刑者は、いずれは、皆様の生活している社会に帰っていく存在です。どうか、受刑者の立直りに御理解と御協力をいただければと思います。

生身の受刑者の生活の場でもある刑事施設で勤務する刑務官は、皆様の目にあまり触れないところで、一年、三百六十五日、二十四時間、絶えることなく勤務し、我が国の法秩序を維持する「刑事司法の最後の砦」として困難な業務に取り組んでいます。毎年秋に開催している高知矯正展を始めとして、当所を参観していただく機会も多くなっています。これらの機会に、是非、高知刑務所にお運びいただき、当所と、そこで勤務する刑務官の姿を御覧いただいて、刑事施設のことについて、もっともっと正しく御理解をいただければ幸いです。ちょっと怖い所ではあるかもしれませんが、決して、暗いところでも、臭い飯を出しているところでもありませんよ！



洗濯板かつお

矯正展

さえき　のりお
一九六一年　大阪府生まれ
二〇一〇年三月まで高知刑務所長、四月より法務省矯正局矯正監査室長。

第21回

高知出版学術賞を審査して

中内光昭

今回の受賞作三点が、八名の審査委員により選出されたのは、奇しくも、東日本大震災の発生とほぼ同時刻、二〇一一年三月十一日午後三時前のことであった。

応募作品数は二十一点で、因に、昨年は十四点であった。分野別に見ると、人文系八（昨年五）、社会系五（同四）、自然系六（同二）、医学系〇（同〇）、総合・その他二（同三）で、人文系、とりわけ歴史に関する出版物が多かった。なお、受賞作に序列はついていない。

左から山本由徳、公文豪、清家章の各氏

清家章著「古墳時代の埋葬原理と親族構造」

大阪大学出版会

本研究は、弥生、古墳時代の埋葬原理（埋葬人物の親族関係、性別、年令層にかかわる規範）を、古人骨、埋葬施設、副葬品などから明らかにしようとするもので、国家の形成や女性史研究の一翼を担う意欲的なものである。

筆者は、第一章で、近畿古墳時代の人骨の「歯冠計測」と「頭蓋の形態変異」から、共同埋葬者間の関係を推理し、共同埋葬者はキョウダイの場合が多いと結論づけている。この結論を、副葬品で補強するのが第二章で、これに、第三章以降の事実も加え、主として近畿地方での、弥生時代から古代国家出現期頃の親族構造に新しい光を当てている。

前方後円墳を主とした首長墓でも、キョウダイを主とした血縁者が共同埋葬される場合が多く、夫婦埋葬は例外的である、としている。

第四章では、女性首長に焦点を当て、女性は男性同様に祭祀を分担していたが、軍事に関しては明らかに男性と機能が異なった、と結論づけている。

これらの結果は、古墳時代初期までは双系的（家長に男女）親族構造であった社会が、古墳時代を通じて父系化したことを示している。埋葬原理の変遷は、社会構造の成熟や国家の誕生などに伴う、男女の役割分担や権能の移り変わりと対応するもので、興味深い事実の提示である。

本書は大阪大学に提出された博士論文をもとに出版したものであるが、必要に応じ「新稿」で著述の流れを補強してあり、単行本としてのまとまりや一貫性も十分である。参考文献、索引も整備され、初学者にはよき入門書となるに違いない。

宇田友猪著　公文豪校訂「板垣退助君伝記」（全四巻）

原書房

板垣退助は著名人のわりに、「伝記」的な記録は少ないとされている。「伝記」としては、わずかに二冊、平尾道雄著『無形板垣退助』と絲屋寿雄著『史伝板垣退助』があるだけである（本書より）。その理由の一つに、退助が官憲の追求を恐れて、身辺の文書を焼却したことが挙げられる。

そのような状況下にあって、一時、板垣退助の自由新聞社に主筆として勤務し、退助を「師父」と慕った滄溟・宇田友猪により記述された、四百字用紙で五千枚を越す『板垣退助君伝記』が、宇田の死後、未刊のまま残され、原稿の所在さえ不明の時期があった。

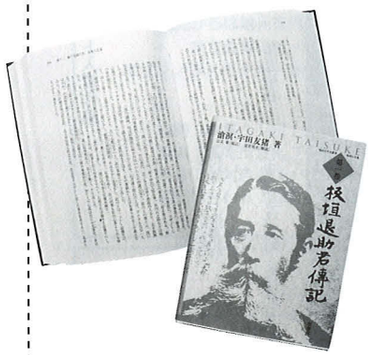
本書の校訂者公文豪は、三年がかりで、毛筆の原稿を解読、新漢字、ルビ等を書き加えてパソコンに入力をすると共に、引用史料を探して校訂するなど、読み易い形で四巻にまとめて刊行したものである。

本書は、ジャーナリストによる原稿を、在野の研究者が校訂したものであるが、巻末に、歴史学研究者（早稲田大学教授）の安在邦夫による、「板垣退助研究覚書」、「板垣退助研究参考文献・史料」、「板垣退助年譜」の三付録「解説」が付され、歴史学的評価を概観することができる。

著者の漢学の素養が垣間見られる格調高い文章で、廉直な退助の人柄が描きだされ、感銘を与える。

本書はまぎれもなく、宇田友猪の生涯を賭けた力作で、公文による校訂で、正確さを加え、たいへん読み易くなっていて、板垣退助や維新期の歴史的研究の基礎資料としての価値は極めて高い。残念なのは「索引」がないことで、膨大な書物であればあるほど「索引」の持つ意義は大きい。

「古墳時代の埋葬原理と親族構造」


「板垣退助君伝記」

サゴヤシ学会編（編集委員長　山本由徳）「サゴヤシ　二十一世紀の資源植物」

京都大学学術出版会

一九九二年に発足した「サゴヤシ学会」の研究成果を、十名の研究者が集大成した学術・啓蒙書で、山本由徳（高知大学農学部）が編集委員長である。本書によれば、約二千六百種の「ヤシ」があり、実が「遠き島」から流れてくるのはココヤシで、本書で扱うのは、サゴヤシである。

サゴヤシは原産地のニューギニアを中心に、インドネシア、マレーシアなどに分布しているが、幹がデンプンに富むため、現地で食用にされてきた。近年になり、食糧やバイオエタノールの原料として改めて注目され始めた。現在のバイオエタノール採取法は、原料食物の価格高騰や環境破壊などの問題をはらんでいるが、本種はこれらの問題を全てクリアできる。

サゴヤシは、言わばマイナーな植物で、研究者も少なかったが、一九七七年に現在の「サゴヤシ学会」の前身学会が発足し、その後の研究で、わが国のサゴヤシ研究は「国際的に最先端を走る」（本書）ようになった。

本書はサゴヤシに関する、最初の総合的な研究書であり、入門書である。サゴヤシの分類、分布、形態、遺伝、生理、生態等の解説に始まり、栽培法やデンプンの利用法などの農学的、工業的知見に加え、民俗学、人類学的な記述も加えられている。

本種は成熟に十年近くを要するという、大きな欠点を持ってはいるが、異常気象等への抵抗力は抜群で、栽培地が従来の資源植物と競合しない等、長所も多く、地球の人口増加を考える時に注目すべき作物である。

本書の出版は二つの意味で時宜を得たものである。一つは実用的な意味で、産業関係者にとっても、一般の読者にとっても有用な出版物である。

もう一つは、学術的な意味である。生命現象は「一様性」と「多様性」の二面性を持っていて、生物学はもともと多様性を足場に発展してきたが、分子生物学の台頭と共に、一様性が研究の主流になってきた。しかし、最近になり、環境問題もからみ、改めて多様性が注目されるようになり、特定の生物種を見つめ直すことが要求されるようになった。このような背景からも今回の出版はまさに時宜を得たもので、若い研究者にとっても魅力的な出版物である。関連文献の紹介も精細で、索引も完備している。

「サゴヤシ　二十一世紀の資源植物」

なかうち　みつあき

一九三〇年　静岡県生まれ
高知大学理学部教授、高知大学長を歴任後、現在は、高知大学名誉教授。第二十一回高知出版学術賞審査委員長。

高知を撮る

第27回写真コンテスト入賞作品

大杉の記憶

（昭和33年11月18日　長岡郡本山町大渕）

上田　政雄

推定樹齢1200年の杉伐採時、町民記念撮影。

走りの虜

風俗歳時記

学生の頃、世の中で一番嫌いだったのが「マラソン」。私が通っていた学校の校内マラソン大会は山道を走るクロスカントリー。足はそこそこ速かったが、無理を重ねいつも苦痛に顔を歪めていた。マラソンを強要されないから大人になりたい！とまで思っていた。そんな私の中で、マラソンが今ブームになっている。

きっかけは五年ほど前の地区民運動会。責任リレーで足が思うように動かず転倒。そのせいで最下位になり責任を痛切に感じた私は、早朝少しずつ走り始めた。翌年は一位。努力と継続でこんなおばさんにも小さなご褒美がやってくる。結構うれしい。高校生の娘は陸上の短距離選手だが、私とは対照的に気持ち良さそうに走る。「百メートルを十二秒台で走ると、空を飛ぶような気分。自分の体の軸を蹴ると、誰でも速く走れるよ」と教えてくれた。そういう娘も、軸探しに二年近くかかった。

さっそく私も軸を探してみる。毎朝六時前の薄暗い中、軸探しをしながら走る。全然わからないままこの半年が過ぎた。私の場合は一生見つからないかも知れないが、最近実に走るのが楽しい。ランニングの仲間も増えた。この秋、「第一回大阪マラソン」が開催されるが、毎年地区民運動会でバトンの受け渡しをしている近所の主婦と一緒に出場しようということになっている。

抽選なので出場できるかどうかはわからないが、前泊してビールを飲みながら作戦会議。当日は帰りのバスでビールを飲みながら反省会…と実に土佐の女らしいマラソンの楽しみ方を計画している。

時の移り変わりは、価値観を多様化させてくれる。苦手だったマラソンは、健康にも美容にも親子関係や近所づきあいにも良い影響を与えてくれている。しかもお金がかからずいつでもどこでも誰でもできるというスポーツだ。人生半ば、やっと「走りの魅力」がわかってきた。

（立花香）

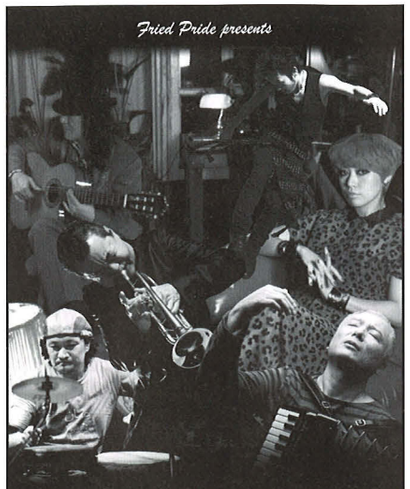
World Music Night Brazilian vol.7

出演

Three For Brazil
Hana san kai

世界の音楽と料理を楽しむ人気プログラムの第７弾。
今回はワールドミュージック“ブラジリアン”ナイトと銘打ち、
ボサ・ノヴァトリオ、スリー・フォー・ブラジルをメインアクトに、
高知からは地元を代表するラテンバンド、花山海が出演します。
また会場ロビーにはブラジル料理の飲食ブースも出店。
ボサ・ノヴァとラテン音楽、そして料理で、楽しい夜を過ごしませんか？

日時：６月11日（土）18:00 開場 18:30 開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと 小ホール
料金：全席自由 2,000円（当日2,500円）
お問い合わせ：（財）高知市文化振興事業団 088-883-5071



フライドプライドと仲間たち

THE PARTY

【出演】
フライドプライド（ボーカル、ギター）
日野皓正（トランペット）
coba（アコーディオン）
ヤヒロトモヒロ（パーカッション）
熊谷和徳（タップダンス）

ニューヨークでのデビュー以来、驚異のパフォーマンスで聴く者を魅了するフライドプライドと、彼らが敬愛するアーティストが繰り広げる音楽の宴。
いずれも世界をフィールドに活躍するアーティストによる夢の共演をお楽しみください。

日時：６月１日（水）18:00 開場 18:30 開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
料金：全席指定 4,500円

お問い合わせ
（財）高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「季節の味わい」

畠中加奈子

この作品は五月の旬のものをテーマにしています。
バックに大きなタケノコを配置し、皮の一枚一枚に「粽（ちまき）」、「さくらんぼ」、「柏餅」、そして子どもたちが見ているだけで喜ぶ「こいのぼり」を描くことで面白みのある構図にしました。明るく華やかな色彩で優しさや温かみを表現し、五月の訪れを実感できるように仕上げました。

（はたけなか　かなこ／
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）

風伯

「オール電化」と「節電」

いま何かを書く場合、「東日本大震災」に関連したこと以外のことを、ひねくれた私でさえ、平然とは書きづらいところがある。かように日本人はみんながみんな、楽しいことやお祭り騒ぎ的な行事は自粛、自粛となる。良くも悪くも日本国中が右へ倣えとなる怖さを思い知る。

原発事故で、私たちはなんとたくさんの電力を使い、電気がなければ何事も出来ない社会になってしまったことかと、改めて気づかされた。これまで原発のクリーンさを宣伝していたことが色褪せ、遠い昔のことのように思える。それに、「電化生活」だとか「オール電化」をしきりに勧めてきた同じ舌で、一転して「節電」を呼びかけ始めた。しかしそんなことだけでいいのだろうかという疑問が湧く。

自分の周りをみても、確かにあまりにも不必要な電気を使いすぎている。コンビニやガソリンスタンドの他店と競うような明るすぎる照明、観ることの少ないテレビの深夜放送、部屋全体を明るくする天井照明など、節電できる部分はいくらでもある。

節電はあくまでも節約で、ひとつの自粛であり、これまでと変わりのない暮らしを温存したままであれば、のど元過ぎれば、早晩節電も忘れてしまいかねない。そして原発はこの狭い日本のなかにやっぱり増えていくことになる。節電もさることながら、むしろいまの暮らし方そのものをこの機会に見直すべきだという声には、根本的なところに目を向けようという姿勢がある。それに、「電化生活」を送ったからといって、私たちが原発の無かった明治、大正のころの人たちより、豊かになったとも思えない。

（霖）

文化高知 No.161 [隔月発行]
2011年(平成23年) 5月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

THE 63TH KOCHI CITY ART EXHIBITION

第63回 高知市展

絵画(洋画)／日本画／書道／先端美術(立体)
彫刻／陶芸／工芸／写真／ペン字／デザイン

開催期間：2011年5月28日(土)～6月12日(日) 午前9時→午後6時
[ただし、月曜日は休館]※初日は午前10時開場、最終日は午後5時終了です

会　　場：高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリー

入 場 料：前売300円・当日400円
長寿手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳所持者、及び高校生以下は無料

出 品 料：一般 1500円／学生 1000円

搬 入 日 時：2011年5月22日(日)・5月23日(月)
午前9時→午後5時

搬 入 場 所：高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリー

Indépendants アンデパンダン

かるぽーと

主催：高知市展代表委員会／(財)高知市文化振興事業団／高知市教育委員会
共催：高知新聞社／NHK高知放送局／RKC高知放送／KUTVテレビ高知／KSSさんさんテレビ

お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

デザイン：和田匠平

http://www.kfca.jp　e-mail kikaku@kfca.jp